

人類共通の無意識（普遍的無意識）からのイメージ

The image from Collective unconscious, a part of the unconscious mind, shared by a society, a people, or all humankind

山本 真理子

アートセラピーのルーツとされ理論的支柱の一つであるユング心理学では、深層心理に普遍的な無意識界が存在し、そこには人間に共通するイメージが存在すると考える。ユング（1875-1961）は、その普遍的な無意識を構成するイメージを「元型」イメージと名付けた。即ち、ここには「普遍的無意識」が生得的に備わっていて、元型は精神の見えざる秩序であり、そのイメージである元型を自動的に呼び起こし、その知恵に助けられ、ストレスや葛藤から助けられると考えられる。アートセラピーは、イメージをここに思い浮かべるだけでなく、表現してみることで、イメージの力をよりはっきりと受け、繰り返しイメージの効果を得ようとする操作である。

ユングは描画の治療力について、心の無意識層から自動的に浮上するイメージの過程、すなわち、無意識から意識領域へと伝播する過程に潜在していると述べている。

人間の無意識層から生命力がイメージによって強く活性化される。生命力を持ったイメージは、描画として表現される。イメージが溢れるように表現されて絵画になった例として下に示した洞窟壁画を挙げることができる。太古の洞窟では神や魂などの超越的なものを想定して、呪術をしていたと考えられている。

最古のものは、3万2千年前のショーヴェ洞窟画（図1）である。オーリニャック文化の洞窟壁画で、ネアンデルタール人の作品と言われている。13種類の対象物が描か

れており、その中にはフクロウやハイエナ、ヒョウなどの動物画も見付かっている。また、スタンプあるいは吹き墨(oral spray painting)の技法を使って浮かび上がるように描かれた手形や、離れて見ると赤い水玉模様(図 1a, b)に見える手形も描かれている。その総数は 300 点を超えると見られている。

興味深い事には、そこに表現された描画には今日の美術作品(図 1c, e)によく似たものが存在している事である。そうした普遍的無意識層からの表出と思われる描画を図 1, 図 2 として以下に併置する。

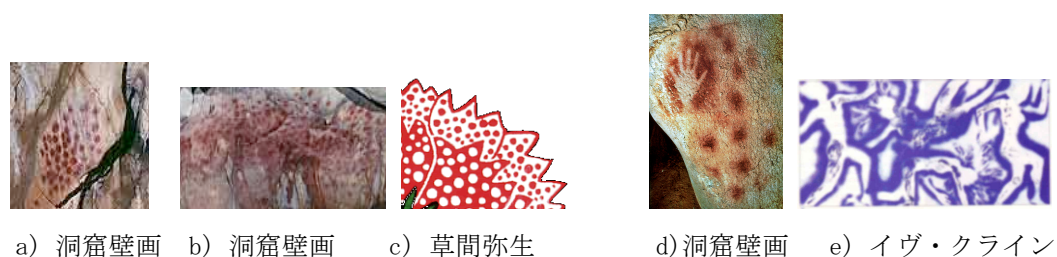


図 1. シューヴェ洞窟壁画(a, b, d; 32,000 年前)及び現代の画家の作品(c, e); 洞窟壁画では、手形そのものが壁面に吹き墨で表出されている絵が見られる。吹き墨とは、陶器などの絵付けで鉄や呉須を水やお茶で溶いたものを霧吹きに入れ、口で吹いていく今日でも用いられている表現技法である。土をこねることの延長線上にある精神状態において行われる行為で、太古から行われていた、原初的な体感的表現行為である。色を何回も重ねることで対象物を浮かび上がらせた行為の原点には、表現を意欲する明晰かつ執拗な「意識」が窺える。この手形の表現意識については、死の意識をベースとして、自分の存在の痕跡を残したいという本能の反映であると考えられる。草間弥生(c)の作品では、a), b)とよく似た水玉が描かれており、32,000 年前の古代人も、21 世紀の現代人もよく似た無意識からの円イメージを表現していることが分かる。イヴ・クラインの作

品 (e) 「人体測定 ANT66」 (1960) は、大キャンバスの上に生身のモデルを置き、上から直接ブルーを吹きつけ、体の形に白く抜くというモダンアートの作品である。一色で肉体の純粹で本質的な情感や、生命の絶対性を形象化しようとした点に、原始の吹き墨で白く抜かれた手型のベースに流れる心性と一致する。



図 2. 南仏のショーヴェ洞窟に残された十字架状の絵 (a) は、キリスト教の誕生以前に象徴的に岩面に描かれたもので、宗教的感情の「元型」であると考えられる。ショーヴェ洞窟の入り口と出口付近にある著しく多くの手形 (b) は、その位置から縄張りを主張したものであるという説もある。いずれにせよ、イメージがより即物的で、記録性を有する原寸大の表現であるが、手のイメージ表現であり、「元型」が表現されている。そこに投影された時間を越えた自己存在確認は、図 1 の説明と同様である。その意味では、日本の赤ちゃんの足型 (c, d)、縄文遺跡から見つかったものも、ショーヴェ洞窟の手形と同様と考える。今日でも我が子の赤ちゃん時代の足型を遺す気持ちはわれわれの習慣に残存し、イメージの普遍性を証明する。加えて、(c) の中央には渦巻き文様がハッキリと刻まれており、元型とされる螺旋や渦巻きの文様の原初性も示されている。(a-d) は時空を超え、民族を超えて人々の心の深い層から浮上する共通したイメージであり、そうした共通イメージに出逢う時、我々の心は懐かしさに包まれ、安堵感に満たされるのでは無いただろうか。従って、意識界と無意識界が分離し、孤独や不安に苛まれる心の救済

として原初的イメージ, 元型へ遭遇する事が考えられる。それはアートセラピーになる。

アートセラピーではイメージのもつ治癒力が利用され, イメージが大きな役割を果たしてきた。ユングによると, 意識と無意識は対立して解離し, その結果, 心が不安定になると言うことである。心が不安定になった時, その回復のためには意識と無意識の統合が必要となり, その統合のためにも心理療法が行われる。通常の心理療法では, 無意識の探索は「イメージする」ことをベースに言語に翻訳して行われる。しかし, アートセラピーでは言語に翻訳せず, 直接そのイメージを用いて心理療法が行われる。イメージすることそれ自体が治癒につながるので, アートセラピーはイメージする事を促すことである。